

西遊夢錄

(十六)

瀧川規

蘇國の部

XVII ジョン・ノックスの家と彼の生涯(二)

英國に於ては舊教信者である女皇メリ・チユドアが崩去され、次代は新教徒のエリザベス女皇の世となつた。蘇國に於ても國情變化しノックスが歸國しても身に危険の迫ることがなくなつた。この時ノックスは第二の故郷とするセネヴァに永久に別を告げて蘇國に歸ることになつた。然るに英蘭のエリザベス女皇は新教徒ではあるがノックス等の主張するが如き清教徒ではなかつた。のみならず女皇はノックス等の一味を好まれなかつた。セネヴァを去つて佛國のサエツプ(Saït-Étienne)に來り今やまさに英國に向つて乗船せんとする時に當つて女皇から入國不許可の命に接した。止むを得ずノックスは數ヶ月をこの乗船地に滞留して一向に入國許可を待つた。この滞留中には勿論のこと、今迄にセネヴァに往復する度毎に此處を通過すること六回、その間に説教を續け遂に六百人はかりの信者を作つた。

遂にノックスはエザンバラ市に到着することが出来、愈故國教化の宿願を達することが出来た。この時のノックスの容貌を想像して見る。其背恰好は中背よりも低いと一般に信じられて居るが、邦人に比すれば十人並以上の背高であつたであらう。目鼻のきりつと引緊つて上品な顔をした人であつた。顔の形は面長であり鼻の人並以上に高いのが特徴であり、眼光は射るが如く鋭く長髯を著へ普通ノックスの肖像として描かれて居る容貌をしてゐた。自然身に備はる威嚴をもち一度怒れば眉宇に人を畏服せしめる丈の威力をあらはした。彼は平素國王の面前に立つて臆せず道を説き得る力を既にその眉宇の間にあらはしてゐたと云ふ。從來の苦難經驗は彼をして愈本舞臺に立ち働かしめるに充分なる練磨を彼に與へて居たのである。その雄辯に至つては舊教徒の一佛人が彼の説教を聴いてノックスの辯は他人の精神を己が欲するまゝに傾使すると稱へた程の雄辯であつた。

當時蘇國に於てはノックス程多く見、多く腦んで來た人は他に一人もなかつた。法埒なる兵士と起臥を共にしたこともあれば、ガヤリ船の奴隸となつて試練を重ね、政治家等と交

り學者と相知り、自國以外に三ヶ國の生活にも經驗があつた今やエチンバラ市に立ち歸つた彼は蘇國の宗教改革を完成するまで幾多の艱難な前途に扣える身となつた。

ノツクスがエチンバラ市に立ち歸るまでには攝政君主のアラ(The Regent Arran)が崩去し、蘇國のメリ女皇の母であるメリ・オブ・ローライン(Mary of Lorraine)が支配したこの女君は佛國王の欲するが如く蘇國を佛國の屬領となさんことを屢企てた。其一方法として佛國より佛兵を招致し宮廷の高位顯職は佛人によつて占められるやうに圖つた。

この有様を見た蘇人は新舊兩教の争を棄て、嘗つて蘇人の祖先が英蘭の勢力を驅逐する爲めになした時の如く互に協力一致して佛國の勢力を排除することに専らつとめた。その結果蘇國に於ては今迄追放されて外國に居つた新教徒の歸國を許すことを女君は餘儀なくされた。ノツクスが安全に蘇國に歸るを得たのはそれが爲めであつた。

ノツクスがエチンバラ市に到着した頃は新教の首領等が攝政君主と戰つて居た争鬭の最中であつた。やがて攝政女皇は新教を許すに條件をつけ只これを傾聴する者のみに説くことな一且許した。然し間もなくこれを撤回したので新教徒は精神の自由の爲めに戦ふ準備をなした。ノツクスは時偶バース(Pert)の町で説教したが因となり爲めに一搔擾が起り暴徒は町の三教會を破壊するに至つた。ノツクスがなした説教の本旨はこれ等の暴徒の手によつて宗教改革を遂行することでは空頭なかつた。新教が平穩裏に蘇國に於て確立すること

を望んだのであるが、斯うした場合主唱者の言が稍もすると暴力化することは屢見る處である。

メリ・オブ・ローラインはノツクスの力が勝つか自分の力が勝つか決定すべき機會が來たと思はれ一方には新教徒の首領等他方には攝政軍の争鬭となり、一ヶ年ばかりも其争鬭が繼續された。史上に所謂宗徒集の戰(The War of the Congregation)として知られて居る内亂となつた。攝政軍は佛國から援兵を得、新教徒は英國より援軍を得て互に戰つたが、攝政軍敗れて、佛兵は蘇國より放逐された。協定の結果、國會を召集して國事を決定することになり、一五六〇年の八月一日にエチンバラ市に於て初めて蘇國史上に有名なる國會が開かれた。國會は蘇國が今後新教國であつて羅馬教國でないことを宣した。斯くてノツクスはエチンバラ市のセイント・チャイルス(Saint Giles)教會の牧師に任命され、多くの聴衆に向つて公然説教するやうになつた。

ノツクスは説教する傍信教簡條を制定する必要に迫られた新教會の信者等に彼等の信ずる處を明白に知らしめ、集會に聖職を配し教會全體を整頓する必要があつた。ノツクス等はこの目的をもつて信仰の告白書を作つて議會の許可を求めた次に教會の統制を書いた訓練第一義とでも譯す可き(The First Book of Discipline)ものを更に作つて議會の允許を求めた議會はこれを許さなかつた。許されなかつた所以は舊教會の財産を新教會のものとする云ふ點であつた。これがまたノツクス等にとつては新教會維持の費途を塞がれたこと

になるので一大痛手であつた。

宗徒集會の内亂の終らぬうちに攝政の女君は崩去され芳紀十九歳のメリ女皇が佛國より歸國されて君臨されることになつた。

メリ女皇とノツクスとの争はこれから始まるのである。既に述べた如く女皇は舊敎國に成人されその敎育を受けられた蘇國は名義上は新敎國ではあるが、國民の大多數も、豪族の多數も共に依然として舊敎徒であつた。メリ女皇の歸國後日を経ずしてノツクスとの争論が起つた。女皇は私に宮廷内に於て自己の信する舊敎の禮拜をなすことを欲しられた。新敎徒の首領たる數名の貴族等はこの自由な女皇に許すのが當然だと考へた。ノツクスはこれに反した。ノツクスの思爲する處は若し女皇にしてこの自由をもたるとならば、他の貴族等もまた同様の自由を欲するであらう。さうなれば一般の舊敎徒も亦同様の特權を與へらるゝことを願ひ、其結果蘇國は新舊兩敎に二分され、舊敎徒が優勢となれば必然新敎徒は再び追放の運命を見るであらうと考へた。ノツクスが今日から見れば過激に失すると思はれる程度にまで羅馬敎の全滅を見なければ満足しなかつた理由が其處にあるのである。

メリ女皇とノツクスとがなした對決の論争は既にホルレード宮とメリ女皇との關係を述べた際に言及した。メリ女皇は四回もノツクスを宮廷に招致された。兩人は臣下が如何なる事情の許にあつてもその君主に違背す可からざるものなりや否やを論じた。女皇は勿論臣下が違背の權利をもたぬことを

主張された。ノツクスは若しこれを認むれば新敎の覆ることを恐れた。大膽に所信を述べて逆鱗に觸れ、諸侯の反感を買つた。

ノツクスが瘡に觸れた點は名は新敎國であつても實際に於て何等施設の行はるゝ處がなく、僧侶は生活の費途を得ずまた敎會は事務運用の爲めに何等備へられることが無いことであつた。妥協策として凡ての敎會の財産に課税されその收得の一半が新敎僧侶に分與されることを約束されて居りながら規則正しく與へられず與へられても約束の全額でなかつた。爲めに僧侶は食に窮し衣服の料を得ず或者は餓死凍死の憂き目を見たものさへあつたと云ふ。

新敎徒の貴族等は若し女皇メリが英女皇エリザベスの後繼者として認められる處には容易にメリ女皇を新敎に改宗させることが出来、その結果英蘇兩國がメリ女皇を新敎の君主として戴く日が来るであらうと想像した。それが爲めにメリ女皇の欲するまゝに一時その自由を許した。然しノツクスはこの意見に反對した。ノツクスは新敎首領等のこの意見は空想に止まることを察知した。果してエリザベスはメリを後繼者となすことを肯ぜずメリは羅馬敎徒のターネリと結婚し、新敎首領のモレイ卿は英國に放逐された。その間に女皇の周圍に醜しき事件が續出した。ターネリとメリとはリツチョのことに於いて争ひ、リツチョは殺害され、ターネリも亦殺され、下手人のホスリエルは女皇と婚した。國人は舉つてこの醜事件に眉をひそめた。その機に乗じて新敎の勢力は擡頭し、メ

リは遂に退位を餘儀なくされ英國に逃げ落ざるを得なくなつた。其後セームス六世が蘇國に君臨するに及んで初めて蘇國の新教が名實共に確立するに至つたのである。

次に攝政のモレイ (Moray) が國政を執るに至つてノツクスとの争闘は止んだが、モレイも亦暗殺されて、彼に繼ぐ可き名君を見出さなかつた。モレイの死するやノツクスはセイント・チャイルスの教會にてその葬式の説教をなして三千の會集に涙を流さしめたと云ふ。モレイの死後またもや蘇國は兩分され互に鎗を削つて争つた。一方には英國に亡命監禁中のメリ女皇を押し立てんとし、一方はセームス王及び新教の爲めに黨派を作つて優劣を争つた。この時の蘇國の有様は父子互に相反し兄弟互にせめぎ骨肉互に食み會つた有様であつたと云ふ。女皇軍はエザンバラ城に立ち籠つて奮戦よくつとめたが、セームス王の軍隊は遂に勝を制した。

その間ノツクスは絶え間なく説教壇上から獅子吼を續けてゐたが遂に卒中が勃發し死期の近づいてゐることを知つたのみならずエザンバラにあつては身の安全を期し難くなつた或夜彼の部屋に向つて發砲したものがあつた。幸にもノツクスはいつもの席を離れてゐたので彈丸は外れた。友人等の勧めによつてセイント・アンズリユズに行つて一ヶ年以上も滯留した。ノツクスは既に年老ひて身の衰弱を覺えた。召使に支へられて家から教會に行つた程であつた。ノツクスの老軀は瘠せ衰へてゐたが一度説教壇上に立つと、ノツクスの雄辯と

元氣とは往時に變らなかつたと云ふ。

やがて兩軍の妥協休戦が行はれノツクスは臨終を友人等の間になさんが爲めにエザンバラ市に立ち歸つた。既に大群衆に聲がとゞかなくなつて居つたので、彼は小人數に限つて教を説いた。最後に教會を去つて家に歸つた時は會集の殆ど全部が見送つたと云ふ。二日後にはげしい咳が續發し呼吸困難を覺え衰弱益甚しく死期の切迫せることを覺り、友人等に告別を告げた。臨終の日には家人に起して貰つて半時間ばかりも椅子に坐し妻に聖書の一節を讀ましめ、最後に一長嘆息をなし死到れりと云つて心の平和を示すために片手をあげ靜かにこと切れた。兎角の批評はあらうが奮闘を權化とするノツクスの生涯を今その家に入りそのうす暗い臨終の部屋を見つゝ想起する時その人の偉大性に自ら頭の垂れるのを覺えるのである。ノツクスの家を去つて足に向ふ處はセイント・チャイルス教會と、教會墓地の南隅に靜に眠つてゐるこの偉人の墓とである。

今日東洋南洋を開ばず英國領土を開拓し獨立的な文明を有色人種の土地に建設せる大英國臣民をその出身地によつて仔細に考察する時、英蘭人よりも蘇國出身の人々が興つて力あることなつくづく感ずるのである。國の内外を問はず蘇國人が凡ゆる事業に成功せる根氣強さを思ふ時、ノツクスの生涯にあらはれた執拗さが蘇人の一面を代表するのではないかと

思ふのである。艱難辛苦に耐え得たるノツクスの性格は或る程度まで蘇人の共通性であるらしく思はれ、熱し易くして冷

め易き國民にとつて、ノツクスが地下より多大の教訓を與へて居るのでないかと思ひつゝ墓前に禮拜するのであつた。

講 話

岩石學用顯微鏡の使用法 (四)

小 川 琢 治

五、平行偏光による検査

岩石學用顯微鏡の偏光裝置は前に述べた如く上下兩ニコルより成り下ニコルを偏光器 *Polariser* (P) と呼び、通例振動面が接眼鏡の縦十字線に竝走する様に裝置され、筒内に挿入する上ニコルを分光器 *Analyzer* (A) と呼び、振動面は横十字線に竝走する。鏡臺下の集光レンズを外づし、下ニコルの上に附屬する弱い凸レンズのみで見ると之を通過する光線は略ぼ平行して縦即ち前後の方向の平面内に振動する偏光となつて、鏡臺上に置いた結晶斷面に入る。故に上ニコルを挿入すれば直交ニコルとなり、複屈折性を有する礦物を通過せぬ限り、視野は全く暗黒となる。

先づ下ニコルのみの偏光で結晶斷面を見る場合に就いて言へば、一見した所では常光で見たのと何等異らぬのであるが、斷面が偏光性を有し ρ_x と ρ_y との互に直角な二方向の一が周邊の物質